

月刊「神戸っ子」昭和38年4月10日印刷 通巻25号 昭和38年4月10日発行 毎月1回10日発行

郷土を愛する人々の雑誌

神戸っ子

1963 / 4



monthly magazine kobekko april 1963 no, 25

大型バス・トラックのご用命は
兵庫日野ディーゼルへTEL④1191～5



高性能の日野

出 足 《ダッシュ》
登 坂 《ハイ・トルク》
旋 回 《ドライビング》

日野
ゴンドツサ

神戸日野モーター TEL④5771～5

これは神戸を愛する人々の手帖です

あなたのくらしに楽しい夢をおくる
神戸を訪れる人にはやさしい道しるべ

これは神戸っ子の心の手帖です



CARカーをあなたに！

カーウエアには

シャープなデザインのスポーツタッチで



マックがお客さまにプレゼントする
世界の自動車ミニチュアカー（英国製）

75種類 1000台

4月10日～30日まで

お買い上げのお客さまに
抽選でさしあげます。

当選のお知らせ5月5日

おしゃれ洋品の **まからずや**



マック

三宮本店

トアロード店

新聞地店

姫路店

神戸センター街

TEL ③ 0895

センター街西口

TEL ③ 0896

新聞地本通り

TEL ⑤ 7688

姫路駅デパート

TEL ② 1261



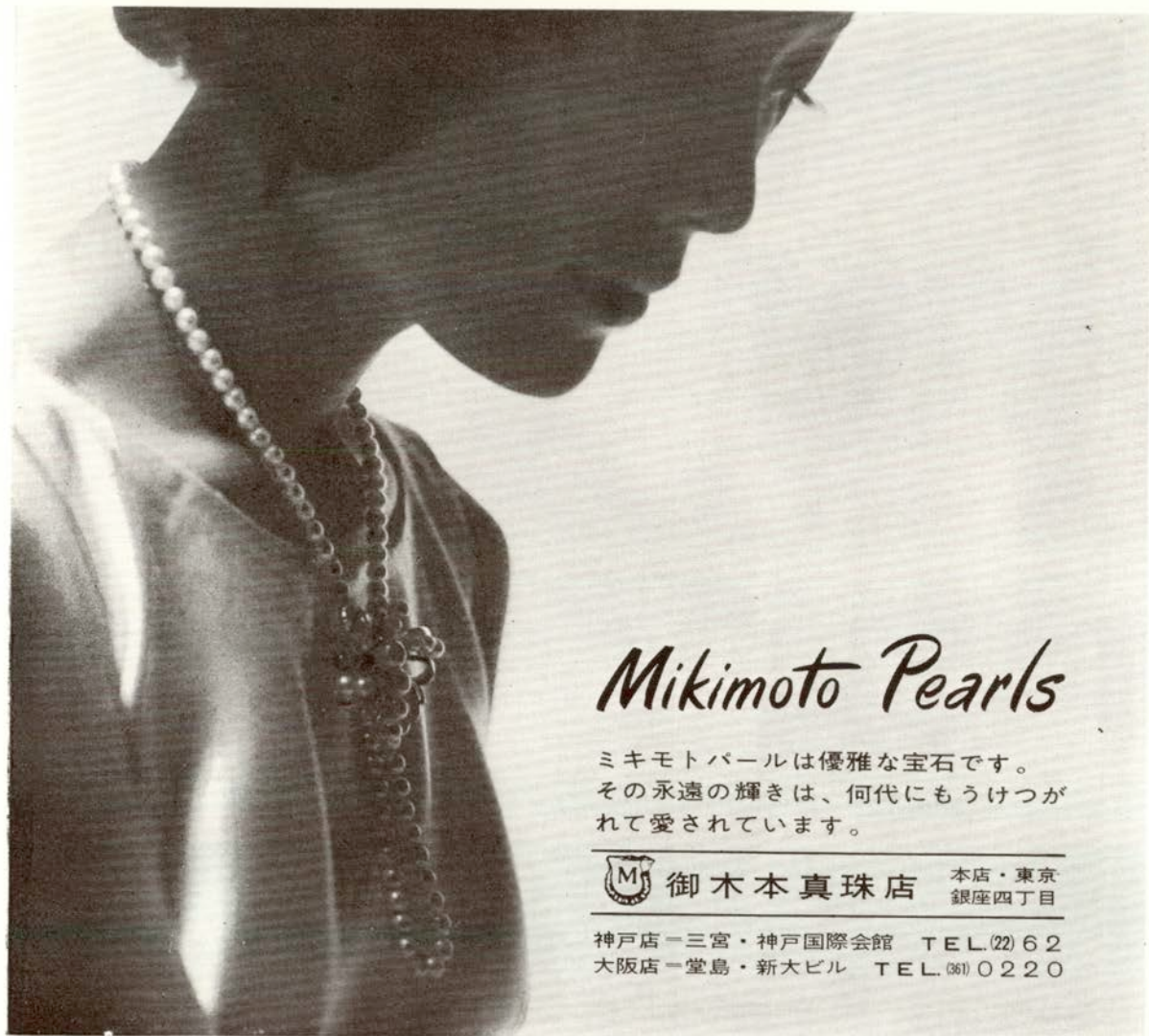
神戸・三宮・生田筋

TEL ③ 0238

神戸と女性

松蔭ゆかり・紅園ゆりか・若みゆき（宝塚歌劇星組写真真右より）
歌って、踊って、青春を舞台にかける。若くて美しい「神戸っ子」宝塚乙女たち、若鮎のようにはつらつと、港を飛びかう鷗のようにしなやかな娘さんたちです。
春の神戸港は、汐風も柔らかく、波も静かにキラメイテ、出帆旗をかかげた外国船がゆったりと出船を待っています。第8突堤に、パッと美しい花が咲いた一コマです。





Mikimoto Pearls

ミキモトパールは優雅な宝石です。
その永遠の輝きは、何代にもうけつが
れて愛されています。



御木本真珠店

本店・東京
銀座四丁目

神戸店—三宮・神戸国際会館 TEL. (22) 62
大阪店—堂島・新大ビル TEL. (361) 0220



目 次

SECOND COVER / 絵・中西勝	1	39 暮しのアクセサリ / ペンダントスタイル 矢野尙明	
神戸と女性 / 松蔭ゆかり・紅園ゆりか・若みゆき	3	41 若い世代の座談会 神戸っ子ハイチーンまかり通る	
随想 / 戦後すぐのこと・竹中郁	7	48 ランチ・タイム	
随想 / 入試の断層・古林喜楽	9	50 紳士入門② / 速成紳士会話・竹田洋太郎	
連載随想第八回 / あの頃の「花いっぱい」運動 白川渥	13	52 神戸うまいもん巡礼 No.8 / 赤尾兜子	
れんさい随想 / ⑨神戸のこと手当たり次第 淀川長治	16	55 神戸っ子タカラジェンヌ春を語る	
連載第三回 / 神戸とエトランゼ	21	56 ピンクコーナー (T)	
神戸ベープから温泉研究家へ・陳舜臣		62 ポケット・ジャーナル	
野のはな対談 ⑥ 岡部伊都子・新出昌子	27	64 随筆 / 東京⇄神戸・武田繁太郎	
私の好きなスター / ペギー葉山・安水稔和	30	68 読者サロン・百店会だより	
春の海 / 伊達俊太郎	33	70 編集後記	
ママのレジャーウェア / 福富芳美	34		



センスを生かした商品がいっぱい
……トアロード店

あなたにピッタリの宝石・指環を創り出す
……加工部

直輸入 **神戸宝石** トアロード店

タニジ

③2397 日曜休

隨 想

戦後

すぐのこと

竹 中 郁
え・小 松 益 喜

「へちまくらぶ」の西村貫一さんが亡くなられて、もう大ぶんになる。

「へちまくらぶ」というのは、戦災で焼けた栄町三丁目の西村旅館あとの庭に、へちま棚をつくって大きなへちまが数十本もなつたところから名づけたのだそうだ。ぐるりは焼野原の殺風景な昭和二十一年の夏に、もうその焼跡はしろうと細工ながらにちよつと落ついたサロンとテラスができていた。ユッカや八つ手をあしらってだんだらのピーチアンプレラでもおいたら結構気分のでるような具合であった。

私はそのころ創立間もない「神港新聞」の記者をしていた。四十才をこえてはじめて安月給をもらうのは、へんな気もちで戸まどつた。なんだか自分がかわいそうな気になることもあった。そんな月給でもくらしを立ててゆくには大切なので、働いた。

そんなころ、西村さんとこへよく出入りをした。著名な学者や知識人がむかしの旅館営業中のなじみとして立寄られることを知ったからである。長谷川如是閑とか吉田文五郎とか木原均とかいった人と面談できたのも「へちまくらぶ」のあったおかげであった。記者



M.K

として、談話をとめることは仕事であったが、仕事以上の質問をして教示を得たことは、今思うと幸である。

文五郎は八十何才であったが、私がぶしつけにも「お師匠はんちよつとあんたの手をさわらしとくなはれ、どんな手であんな人形のやさしい身ぶり手ぶりが出るんだす」ときくようにして頼んだ。

「へえ、みとおくなはれ、これこんなにタコだらけだす」というて両手を私の目の前へ差し出してくれた。みると、なるほど繰るために当る個処はかたいかたいタコがある。あちこちと七八個処つもある。しかし、そのタコ以外のところはつやつやとして綺麗で、三十台の女の手よりも美しい肌合いである。しばらくは離したくないような掌であった。

フランスの大彫刻家のオーギスト・ロダンの画集に、ロダン自身の手の大うつしの写真のあるのを私は持っていた。そのロダンの手は写真を通じてだが、じつにやわらかそうなやさしみの溢れた美しい手だった。

東京の上野の西洋美術館や、倉敷の大原美術館の前庭にあるロダンの彫刻をみて、だれがこのやさしい手を連想し得るだろう。

文五郎の手も、ロダンの手も、考えるところ、使いぬくことによって姿も肌もやさしく美しくなったのだとしか思えない。

あのとき、私がカメラをもっていたなら文五郎の手をうつさせてもらっていたのに、今思うと惜しいことをした。私はむかし、ドイツ物のイコンタをもっていたのだったが、折悪しく借金のかたに預けてあった。

西村さんはいわば神戸の文化斡旋所長みたいな役割を大正の中心からしつづけてきていられたような気がする。御自身では「日本ゴルフ史」を書いたりして悠々と人生を送られたが、この斡旋事業が神戸の土地へしみこんで、いろんな効をたてていることを、忘れないようにしたいものである。夏になると、いまでも「へちまくらぶ」のへちまはぶら下っているにちがいない。

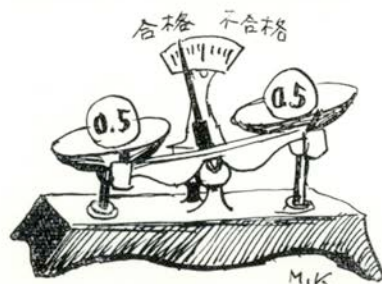
(詩人)

隨
想

入試の断想

古
林
喜
樂

え・小
松
益
喜



七・八年まえのころ、私の知っているさるおえらがたが、大阪の新興成金の社長をつれてきていう。「この人の息子さんがこんど神戸大学を受験しますのでよろしく。この方は息子さんが入られたら神戸大学へ一千万円寄附するといっていますよ」と。

さてふたをあけてみたら、ドンビリに近く、数学が0点、英語も0点に近く、よく厚釜しくもこんなのが受けにきたなと思うほどひどいものであった。国立大学には情実なんか全然きかない。文部大臣の子供であろうが、社長の子供であろうが、恩師の子供であろうが、点の不足したものはドジドジ落されてしまう。今年なんか、九百点満点でわずか〇・五点の差が合格のさかい目になった。〇・五点ではあまりにもかわいそうではないか、このままでは拾ってやつたらと、誰しも思うのであるが、さて〇・五点下へきけると、又その下に〇・五点差がつづいている。しかも同点のものが三・四人も並んでいる。次つぎ果てしがないわけで、結局心を鬼にして切り捨てざるを得ないことになるのである。〇・五点差のものなんかは、実力になんの相違もない。もう一回問題をかえて入学試験を受けさせたら、恐らく合格の入れかえがかなり出てくるであろう。よい成績で堂どうに入ったものと、箸にも棒にもかからぬ落第組のものとは、なんと試験をくり返しても、同じ結果になるであろうが限界で入ったものは、その日の運がよかったに過ぎないのである。だから大学の入試に落ちたぐらいのことで、くちけちゃ駄目である

私なんか母に内緒で、こっそり京大の入試をうけ、通ってから母に合格通知を見せて、大学へ行かしてくれとせがんだ。母が反対であつたらあつさりあきらめて就職するつもりであつた。私のクラス・メートの連中で、大学へ入らないまま実業界入りをしたものは、このごろ次から次へと一流会社の社長や副社長、専務や常務になっている。私の方はいまだに、霞をくうて貧乏学者生活を送っている。

人生というものは、勿論金だけのものではないし、私は私なりに金には変えられない有難さと幸福感を味つてはいるけれども、長年さんさん苦勞を重ねてきた妻は、内心果してどう思っているであろうか。あの時大学の入試に落ちていくれたらよかったのにとあるいは思ったこともあるであろう。尤も私が実業界へ入っていたら今の妻との縁が結ばれていなかったかも知れないが。だからあとで考えて、なにがよかったか、入試にズバリ入った方がよかったか、落ちた方がよかったか、浪人をしたので結局よかったということになったのではないか、浅はかな人間どもにはわからないのである。入って却って悪くなるのも、落ちて却ってよくなるのも、結局本人の心がまえと努力が決するのである。永い人生の旅路をふりかえってみたら、入試なんかはほんの小さな一こまにすぎない。

さて話しは振りだしにもどる。発表もすんだある日、かの成金さんが学長室へ押しかけてきた。そこで私は彼氏に成績を詳しく説明して、これではとても駄目ですよ。来年受けられても、さ来年受けられても、とてもとても駄目ですよ。本人の実力相応のどこかの大学を志望されたいかがですかと、いとも懇切にいねいに、ことわけて話した。ところが成金氏から、とんでもない言葉がとび出してきた。

「先生、私は大学に千万円寄附するといつたのですよ。あれほどちやんといつたちやないですか。」

私は天を仰いで慨嘆した。親馬鹿という言葉があるけれども、ここまで度はずれのには、会うたことがないからである。しかし親は親として、あの息子がいま、どこでどうしていることであらうか、ときどき気にかかる。

(神戸大学教授)



ごあいさつ

元町のサービスステーションが移転いたしました。

新しい店舗は、元町2丁目山側にひらき、真珠の粋をあへめて飾らせていただきました。

新店舗は、みなさまにいつそう親しんでいただけるよう、心をこめて設計、新築いたしました。

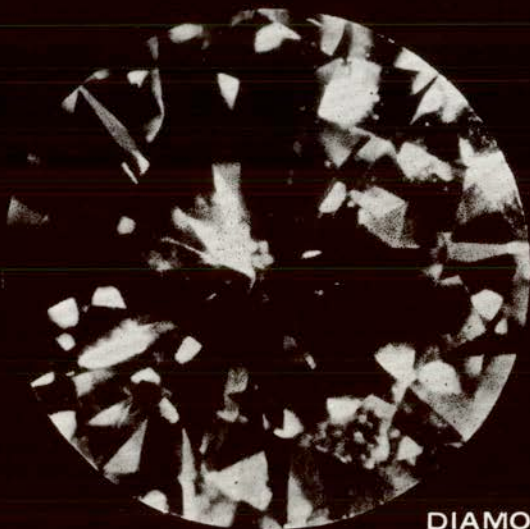
どうぞ、お気軽にお越しください、いっそうのご愛顧をいただきますようお願いいたします。



北村真珠株式会社

神戸／元町2③0072
東京／スキヤ橋センター (571) 8032

確信をもってタジマの目を選んだ世界の宝石の名品！



DIAMOND 5.35cts

写真は原石の40.48倍

宝石輸入商・宝飾店

タジマ

TAJIMA SHOJI CO., LTD

元町2 TEL ③ 0387・2552

あの頃の 花いっぱい運動

白川 渥勝
え・中 西



先日、著作年譜を作製する必要から古い雑誌の整理をしていたら敗戦直後某誌に書いた「花一輪」と題する随筆が出て来た。これは私が神戸の市視学をしていた頃、同志の先生方と相図って、焼野ヶ原の街に、いわゆる「花いっぱい」の運動を起した時の記録で、「花時計」まで出来た只今と思ひ合わせ、いささか感慨を催すものがあった。あれから十八年目の花の季節を迎えて、当時の模様を少し思い出してみよう。

——敗戦直後のある日、神戸市の女教員の幹部の人たちの集まりがあり、私も職務の関係で列席した。これはむつかしく言えば市の教育審議会女子部と称するものだが、その席上、女教師の地

位の向上、待遇の改善と言うようなおきまりの問題と共に、「私たちの力で花を作る運動を興しましょう」と言う提案があった。

彼女らの話によれば、いまの学童たちには野草の花さえも与えられていない。いったいに花と言うものを識らない子供になっていると言うことだったが、当時、私も或る学校で不幸な子供たちの一群を目撃していた。ちょうど掃除の時間だったが、教師の不在をよいことに、教室の、それも教卓の上で、五十銭札をハッてバクチをやっていたのだ。街頭浮浪の学童、進駐軍にもねだる乞食学童、童心を失った靴磨き。——冷徹な敗戦の現実の実態はいろいろ見せつけられていたが、その同じ荒涼が学校の内部にまで及んでいたことに私も少からず憤りをおぼえていた矢先きである。

そうだ、花を作ろう。花でも作るより他に、そう言う「立ち直り方」より他に、いまの日本にどんなまっとうな復興の姿勢があるかあるものはバラック的な、ヤミ市場的な立ち上り方ばかりではないか。焼土を復興するものは、やはり精神の一角からである。一輪の葩(はなびら)からである。花を植えよう。神戸の焼野ヶ原を、全市と教師の手によって花園にしてやろう。強盗の出そうな辻々を、校五万の学童区の子供たちの手で一ばん綺麗な花園にしてやろう。春にはタリヤ夏にはカンナ。秋になったら山の手のメーンストリートの両側になびく清廉なコスモスの列。——雑草の種すらも焼け絶えたと言う街の復興に、そう言う風流な経緯もあってよいではないか。当時の学務課長は、いまの教育委員長の木戸只一氏であった。私は木戸さんの賛成を得て、校長会の席上で次のようなおしやべりをした。

「花より団子」と言うが、「団子よりも花」と言う命題も成り立つ。いや、これを成り立たせなければ教育と言うものも成り立たない。たぶん、来春花の咲く頃は、われわれの食生活はもつとガツガツしてくるであらう。それと共に街の道義もいよいよ荒涼としてくるでしょう。その覚悟が要るとすれば、焼跡に花を咲かせると言うことは、決して女学生的な甘い感傷ではない。巷の「団子主義」に抵抗してゆくのが、本来の学校の使命なんで、母親学級などを作っ



て下手な社会教育の説教などするよりも。……花を忘れた子供は、いわば歌を忘れたカナリヤである。いや、不幸は子供や女学生ばかりではない。風流を忘れた大人だって同じ哀れなカナリヤである。教育のありようを譬えて「桃李自ら蹊を成す」と言うではないか校下の浄化のためにも奮起して欲しいと一席ぶったわけだが、何しろこちらは若僧視学。老校長たちはひどくシンドウさうである。曰く、花園を作っても管理がむづかしからう。蕾の時から盗まれるだろう。……

だが、私は言った。花園の経営には寛大な気持を持たねばならない。もともと市民に提供する花である。通りすがりに一輪摘んで胸に挿す紳士淑女諸君があれば、むしろ微笑をもって見逃がしてよい中には、一束とって己れの部屋に持ち込んで、ひそかに独占的に味わう洞窓な書斎人があるかもしれないが、それも亦可なりである。花泥棒は泥棒の中でも一ばん風流な種族である。増産園の「野荒らし」とはちがう。それくらいの放図もない寛大さを持って始めねばこの運動は成功しない。

——とにかく、やればやれる。それほどシンドイ仕事ではない。焼跡には「余白」がありすぎる。赤錆びた自転車、骸骨。へし曲がつた鉛管。まだこれから本土決戦でもやりそうな焼け瓦の囲い。あの囲いのもとにだって、草の花は咲くんだ。……

と言うようなことで、シンドがる校長は黙殺して、女教師と中堅男教師とだけではじめた運動だった。……あれから十八年、軍靴をはいて活躍してくれた中堅教師たちもいまは市内の大校長になっている。そう言えば、私が木戸課長の紹介で種子代をせびりに行ったのは、当時の復興本部の課長、いまの宮崎助役だった。……そしてあの頃辻強盗が出ると言われた大倉山の十字路、あのあたりの路傍には、たしか、田舎の小学校の学童たちから送ってもらった曼珠沙華の球根を植えた筈だった。……

(作家)